

氏名 馬 紹華

本論文は上代から近現代までの、複合的な原因・理由表現を取り上げ、その意味機能、歴史的な変化、類義表現との違いなどを論じる。全体は3部11章から構成される。

序章では、従来の原因・理由表現全般の研究史をたどり、研究対象を特定する。

第1部第1章では、上代語「からに」のほぼすべての歌が順接とも逆接とも解釈できることについて、その条件関係が例外的な期待を表すことから説明できると論じる。

第2章では、「ゆゑに」の歌には順接と解釈できるものと逆接と解釈できるものがあるが、後者は前件に否定が多いなど、一般的期待と現実とが対立していることを指摘する。

第3章では、「ものゆゑ」と「ものから」について、前者は上代には逆接を表していたものが中古以降次第に順接を表すようになったことを示し、後者は前件と後件とが対立する内容であることから逆接と解釈されるもので、両者の用法は異なると論じる。

第2部第1章では、「せいで」は中国語の行為・しわざを表す「所為」が起源であり、中古から中世にかけて原因・理由の用法を獲得し、近世の音韻変化を経て「せい」となり、さらにAハBセイダが倒置してBセイデAとなり接続助詞化したと論じる。

第2章では、「ばかりに」について、中古では事物の限定に用いられていたのが、中世には事態の限定に拡張し、近世に目的を経て原因・理由を表すようになるが、目的を達するために強引なことをすることもあることから望ましくない結果を表すと論じる。

第3章では、「おかげで」について、本来「かげ」は光やその影・形を表すが、中古には「庇護」に拡張し、中世に「おかげで」で「恩恵」を表す用法が成立すると論じる。

第3部第1章では、「うへは」は中古に「上」の意味から「累加」の用法が生じ、中世には時間的な「累加」関係として、事態の因果関係と判断の因果関係とが成立するが、前者が後者に合流して現代では判断の因果関係として用いられることを論じる。

第2章では、中世後期に成立した「からは」も判断の因果関係を表し、さらに説明の根拠と行動の根拠に分けられ、それが現代語の「からには」「以上は」につながることを示す。

第3章では、現代語の「以上は」と「からには」が、前者は確定的・仮定的事態とともにとるが対照的含意があり、後者は確定的事態をとるが対照的含意の有無は自由だと論じる。

終章では、原因・理由を表す主要形式と、複合的な形式との関係について論じ、歴史的に事態の因果関係を表すものから、判断の因果関係を表すものに変化したことを論じる。

本論文は、条件表現全体への位置付けは更に検討を要するが、原因・理由を表す複合的形式に各々興味深い特徴があることを示した点で高く評価できる。この理由から、本審査委員会は全員一致で本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するとの結論に達した。